

→星降る町で織姫伝説と降星伝説をたどる

2018. 3. 11(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 532 回 参加報告

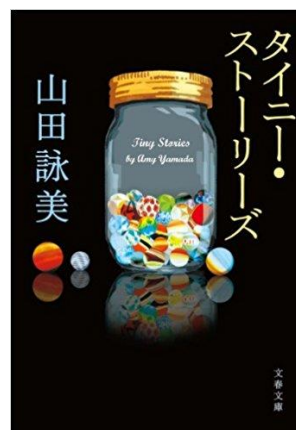
それで「郊祀(こうし)」は古代中国で、天子(天皇)が王都の郊外で天地を祀った祭礼のことだという。円丘、あるいは壇を築き、そこで自らの皇祖を祀って五穀豊穰や国家安泰などを祈願する、また祈願成就の礼をする祭りで、『続日本紀』に、前述のように桓武天皇の御代に2度行われたと記されている。その祭祀地は、長岡京から南へ一直線の交野ヶ原郊外であったらしく、その地は今のところ特定はされていないようだが、樟葉の交野天神社が有力視されているとか。

交野ヶ原は、大和から長岡京へ向かう道筋で、崇神天皇の代には、反乱を起こした山城の建波邇安王の軍が、崇神軍に追われ、逃走した道筋に当たる。『古事記』によると、この時は淀川に出るべく山城から樟葉に向かって交野ヶ原を横断しているが、桓武天皇の長岡京遷都や当地での郊祀壇祭祀は、この故事のルートとは無縁ではないようだ。その後、交野ヶ原は皇族や貴族たちの遊猟採集の地となり、惟喬親王の渚院など別荘が設けられ「世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」(在原業平)、「散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき」(紀有常)などの歌でも知られる桜狩りを楽しむ遊興地ともなった。しかし、山間部や交野ヶ原に点在する磐座は、本日は立ち寄れなかったが、星田妙見宮や獅子屈寺などに降星地として顕著に<星>に纏わっており、交野に伝わる「天の磐船」などの昔がたりとともに天空と関係して謎めいている。

興味が湧いて、さらに帰宅してから当地の地域情報を提供している「交野タイムズ」を見ると、記事に、これらの座を結ぶと交野の地上に<五芒星(星形正五角形)>が描ける…とあった。併せて本日のレジュメを再読し直し、想像力を膨らませると、ますます改めて訪れてみたい町だと思うのだが、持続力不足と好奇心が次々に移る性分のわが身、それはいつの事になるのやら、とも思っている。

ところで、「一年に一夜と思えどたなばたの逢い見む秋の限りなき哉」と、紀貫之が詠んだ歌が、レジュメに紹介されているが、本日の見学最終ポイント、逢合橋は、交野から枚方市域を流れて淀川に注ぎ込む「天の川」に架かる橋。ここで、機物神社の織姫と、川向うの枚方市香里ヶ丘の彦星(牽牛)が、一年に一度、出会うのだと伝えられている。彦星を象徴する「牽牛石」なる岩が、香里ヶ丘の観音山公園内に存在するそうだが、本日は、そこまで足は伸ばさない。その牽牛が、織姫とのデートのために使う車を洗う時に降る雨は「洗車雨」というそうで、「催涙雨」「洒涙雨」「灑涙雨」(＝いずれも読みは「さいるいう」と共に、七夕用語に載せられていて面白い。その七夕伝説――

「天の川の東の宮殿に住む織女は、機織りが上手く毎日一所懸命仕事に励んで恋をする



暇もない。それを憂えた父の天帝は、天の川の西端に住む、これも仕事熱心な牛飼いの牽牛に娶わせた。そうして始まった新婚生活では互いに思いが深すぎて、共に仕事が疎かになっていった。それまで化粧などせずに仕事に専心していた織女も、毎日鏡の前でやつしてばかりという有様。父帝は、娘の変わりようを見るに見かね、織女を東の宮殿に連れ戻し、牽牛を西の岸边に追いやった。そして天帝は、1年に1度、七夕の夜にだけ、天の川を渡って逢瀬を楽しむことを二人に許したのだった」――

さて、今年の7月7日の七夕の日のお天気はどうであろうか。機物神社で行われる「七夕まつり」には、境内とところ狭しと五色の短冊を吊り下げた笹飾りが並び、眩いばかりだそうである。

<報告：田淵浩一>